

今井邦子の短歌における「光」の表象

鈴木文緒

1 はじめに

明治後期から昭和にかけて活躍した歌人のひとりに今井邦子が挙げられる。彼女は島木赤彦のアラギ派の影響を受け、アラギ派を離脱後は女性のみで構成される短歌雑誌『明日香』を創刊するなど後年まで意欲的に活動した。第一随筆集『姿見日記』に収録の短歌集「迷走」を含めると、生涯で六作の短歌集を刊行している。そして、『今井邦子短歌全集』には未刊行の短歌を集めた「拾遺」までのすべての短歌が収録されている。それらを読み解いていくと、彼女の歌には「光」の単語が多く詠みこまれていることに気付く。なにげない生活の一場面を描写する際にも、大切な人との死別の際にも、この単語が使われている。『今井邦子短歌全集』に収録されている短歌の中で、「光」について詠まれているものは二六七首ある。⁽¹⁾ すべての短歌集に必ず「光」の短歌は詠まれている。このことから、今井

は短歌を詠み始めてから晩年に至るまで、「光」に着目して短歌を詠んでいたことがわかる。

一方で、その単語が持つ意味合いは時代によって大きく変化している。自身の生活のなかにささやかな「光」を見出していた今井は、戦時色が強くなっていく世の中において国の未来に「光」を見るようになっていく。

しかしながら、今井が重点的に詠んできた「光」についての研究は進んでいない。平成六年（一九九四年）に塚本邦雄が『片片』の短歌を取り上げ、今井邦子の太陽に向けた嫌悪感について述べているが、それは今井のリアリズムの目線を論じる補助線にすぎない。今井の生涯の短歌全体を見渡した「光」考はな

いに等しい。

本稿では『今井邦子短歌全集』に収録されている「光」を詠みこんだ短歌に着目することで、今井にとって「光」とはどのようなものであったのか、また年代によってその表象がどのよ

うに変化していったのかを考察する。

なお、本稿中での今井邦子の短歌の本文は『今井邦子短歌全集』（短歌新聞社）に依拠する。

2 今井邦子の「光」を考察するにあたって

今井邦子の「光」について考察する前に、彼女はどのような歌人だったのか。『今井邦子短歌全集』（短歌新聞社）と『戦時下の文学者たち…『萬葉集』と生きた歌人・詩人・小説家』（花鳥社）を参考にしたうえで、今井邦子の生涯について説明していく。

今井邦子は明治二十三年（一八九〇年）の五月に徳島県で生まれる。本名はくにえ。生まれて間もなく、父邦彦の仕事の多忙さから姉とともに父の郷里である長野県下諏訪町の祖父母の家に引き取られる。この姉の勧めで明治三十六年（一九〇三年）ごろから『少女界』や『女子文壇』などの雑誌に詩歌を投稿し始める。徐々にその才能を認められるようになった今井は、明治四十三年（一九一〇年）に上京。河井醉茗の協力を得て中央新聞社に入社し家庭部記者となっている。そして翌年の明治四十四年（一九一一年）に同新聞社で政治部記者として働いていた今井健彦と結婚、妻としての生活を歩み始める。

家事や育児のかたわらに創作活動을 続け、大正元年（一九一二年）に散文集『姿見日記』、大正四年（一九一五年）に第一歌集『片片』の発行を果たす。その後、大正五年（一九一六年）

に島木赤彦の門人となり、同年に『光を慕ひつつ』を発行。昭和六年（一九三一年）に『紫草』を出版するなど活発な活動を行う。

アララギ会員として、島木の指導を受けていたが、彼が亡くなるとアララギを離脱する。昭和十一年（一九三六年）に女性のみの短歌雑誌『明日香』を刊行し、その二年後には『明日香路』を出版している。晩年は衆議院議員となった夫健彦の選挙活動を手伝い、名流夫人としての地位を確立した。昭和二十三年（一九四八年）に心臓麻痺により死去。享年五八。

今井の青年期から晩年にかけての活発な創作の原動力となつたのは、彼女のなかにある満たされない思いである。長野で創作活動を行っていた今井は、詩人として大成したいという思いから親の決めた縁談を拒否し、東京に出走を繰り返している。結婚後も今井の文学に理解を示さない夫との衝突は絶えず、母親としての自分に戸惑い、子どもへの愛情に苦しみ今井が短歌にはしばしば登場する。自由に生きたいと願いながらも、形式を守りすぎるくらい大切にしていたその性格は今井を苦しめ続けた。その苦悩を今井は短歌を詠むことで昇華していたのである。

3 今井の短歌における「光」

今井の創作活動の根源を成していたのは彼女の満たされない思いであるということ、先に述べた通りである。「光」はその今井の苦悩に満ちた生活の身近なところに存在している。故

郷の長野での日々にも、東京での新婚生活にも、満足できない生活の中に「光」は描かれているのである。

今井にとって「光」は大きく二つに分けられる。ひとつが今井の苦しさを克明にする「光」であり、もうひとつが今井の苦しさに寄り添う「光」である。一見すると矛盾しているこのふたつの「光」と今井は向き合っていた。

まず、今井の苦しさを鮮明にする「光」であるが、これは今井の初期に作られた短歌に多く詠まれている。

秋の日の光のなかを歩みぬ淋しき事を胸にとひつ、

（「迷走」「二十歳の悲しき情緒」）

流れくる朝の光よ真白なるシートに寝たる我が悲しき

（「迷走」「年は淋しう暮れて淋しう明けぬ」）

青葉若葉きらめき光る六月の丘にゆく道見れば悲しも

（「片片」「夏に入らんとして」）

山々に陽のさしくれば洲羽の湖の水青光り身のまさびしき

（「片片」「洲羽の歌」）

上記の短歌は第一随筆集『姿見日記』に収録されている「迷走」から第一歌集『片片』に収められている「光」を用いた短歌の抜粋である。今井の「淋しさ」や「悲しさ」の隣に「光」が描写されている。

一首目は、「迷走」で具体的な説明はなされていないが前後

の歌から推測すると二十歳のころに作られたものである。ちょうど、今井が新聞記者として働き出したころであり、仕事に対する充足感と疲労感を感じていた時期でもある。淋しさから来る自問自答を秋の日の光のなかで行っている姿が表されている。

二首目は、結婚前後の時期に作られたものであり、真つ白なシートに横たわる今井の胸にあるのは晴々とした気持ちではない。朝の光に似つかわしくない「悲しさ」である。光のなかにも、真つ白なシートを使っている今井の悲しさは癒されない。

三首目は、今井が母親になったばかりの頃に詠まれた歌である。母親として子供を愛さなければならぬ気持ちと、詩人として自由に生きたい気持ちで葛藤していた今井はこのころ強い孤独を感じている。この短歌群で詠まれている子供のいる自分の家は暗く、外の青葉はまぶしくらいに輝いている。今井にとって夏の「光」とは家庭への屈折した気持ちを浮き彫りにさせるものだったのである。

四首目も長女節子を出産した後の歌である。今井は故郷の長野県諏訪に戻っている。今井はこの諏訪の土地を好ましく思っており、結婚した後も頻繁に帰郷している。そのような心安らぐ場所においても今井の「さびし」さはぬぐい切れない。当時も家庭に縛られる苦しみが今井のことをさいいんでおり、故郷の山、湖、それに反射する陽の光を見ても癒されない淋しさが強調されている。

今井の苦しさを克明にする「光」は太陽の光のような大きな光であることが多い。圧倒的に大きい「光」の中で今井は苦しさを自覚し、それを増幅させてしまふのである。

塚本邦雄は今井の『片片』に収められている太陽についての短歌に着目し、彼女には「太陽呪詛」なる感情があることを指摘した。雑誌『明星』で活躍した与謝野晶子との太陽讃歌とは対照的な太陽に向けた嫌悪感があるとしている⁽⁴⁾。

今井は自分の内にある激しさを嘆いていた。四角四面な性格の思い通りにならない自分の心のありように苦しみ続けている。太陽の「光」はそうした激しさをより強調させるものだった。今井は自分の苦しみを心の暗いものとして捉えていた。「光」の輝きはその暗さをより際立たせるものだった。明と暗の対比は「光」があることで、克明になる。そのため、今井は太陽に對する劣等感を抱いていたのである。朝の太陽の「光」も夏の「光」も彼女の淋しさを鮮明にさせた。今井は光のなかにいる、またはそれに照らされることで、自身の淋しさを一層身近なものにしていたのだと考える。

つぎに今井の苦しさに寄り添う「光」であるが、今井は太陽の光を憎みながらも「光」に寄り添うような姿勢を一貫して保ち続けている。矛盾していた「光」に對する向き合い方は今井のなかで混在していた。そして、徐々に太陽の光に對する憎しみは消えていき、自身の悲しみを癒す「光」に目を向けるようになる。それは今井が詩人として円熟してきた時期と重なって

いる。

水光る秋の磧かはらのぬくとさに石に腰していつまでもぬ

（「迷走」）「二十歳の悲しき情緒」
蒼白く瓦斯がすの光ぞしみ来るうらぎりあへる暗き心に

（「片片」）「或る日或る時」

このあした起き出でて見れば冬の庭のさびしきなかに光る椿葉
（「光を慕ひつつ」）「冬しずかに」

ちりにかも泥にかも似しわが内に一粒光るたまよ淋しき

（「光を慕ひつつ」）「心から その二」

泥舟の底よりも、灯の光りほのかに淡く夜や更けぬらし

（「光を慕ひつつ」）「人々」

うつせみの歎きにひたり居る夜にはたる光りて庭に来しかも

（「紫草」）「ほたる火」

上記の短歌は「迷走」から第三歌集『紫草』に収められている。「光」に對する肯定的な気持ちを描いた短歌の抜粋である。

「光」に對する抵抗感が徐々に薄れていくのが明確になっている。一首目は、「迷走」に収録されている今井が二十歳前後の時に詠まれた短歌である。前後の歌から推察すると故郷の諏訪にいた時の歌である。川の水に反射する「光」をいつまでも見ていたいとする今井の姿が描かれている。秋の川の水の冷たさと、そのすぐそばの「磧」のあたたかさの対比が描かれている。水

の「光」の静けさと、石のぬくもりの両方が今井の苦しみを癒すものとして機能している。太陽の「光」が反射した水の「光」は、今井にとって彼女の激しさを克明にするものではなかった。

二首目が収められている「或る日或る時」の短歌群では、文学に無理解な夫と激しい喧嘩をした後に詠まれている短歌が多く収録されている。これもそのなかの一つであり、夫と夫婦喧嘩をし、家を出たときの歌だと推察できる。文学に理解を示さない夫との夫婦生活は今井に暗い影を落とした。暗くなってしまうた心に「蒼白」いガス灯の「光」が「しみ来」んでいる。明と暗の対比が鮮明になっはいるが、「しみ来る」という単語からその「光」が今井にとって不快なものではない。太陽の「光」とは異なり、ガスの青い「光」は今井の苦しみを軽くするものだった。

三首目は朝の光を受け入れる今井の姿が描かれている。この短歌が収録されている『光を慕ひつつ』では、アラガ派の島木赤彦の影響を受け、写実的な作風を取り入れている。変化した作風の中で、今井の淋しさを照らす「光」は静かなものとなっている。「さびしきなかに光る椿葉」という部分から、今井の苦しさを強調するものではなく、淋しさのなかに優しく輝く「光」の様子が描かれている。椿の葉から受ける「光」は今井にとって淋しさを癒してくれるものだった。

四首目も同様に、今井の苦しさに寄り添う「光」が表現されている。この歌では身の内にある泥のような濁ったものの中に

「光」を見出している。そして、その「光」は「一粒」という言葉からでもわかるように、小さな光である。その「光」を見て淋しさを感じてはいるものの、その感情を強調するものではない。淋しさを受け入れ、濁りの中にある「光」を大切にしていこうとする今井の意志がある。

五首目でも小さな「光」が描写されている。「泥舟」といった泥を運ぶ船の底にはほのかに「光」が灯っている。夜の暗闇や、泥の中で小さく見える「光」に今井は共感を持っていた。濁ったものと小さな「光」を今井は対にして考えているのである。二首目の暗い心とガス灯の「光」からもわかるように、今井は「光」を描く上で対比を重要視していたことがわかる。

六首目は『紫草』の「ほたる火」に収録されている短歌である。今井は生きている自分の身に起こる嘆きを感じている。そんな暗い夜に螢の「光」は今井のもとに訪れて、その苦しみを癒している。ここでも現実の嘆きに応ずるような夜の暗さと、小さな「光」は対照的な関係にある。この短歌の「光」は太陽の光でも月の光でもないが、小さな螢から生まれるかすかな「光」は今井の苦しさに寄り添うものだったのである。

今井は太陽を憎悪していた時期も、水に反射する「光」やガス灯の「光」に心を寄せていた。自身の苦しみを克明にする「光」と自身の苦しみを癒す「光」は今井の内に共存していたのである。この時期に限ったことではないものの、描写された苦しみを癒す「光」はガス灯のように「蒼白い」ものとして描かれる

ことが多い。「片片」には「うす青く初夏の風つとばかり狂はんとする瞳に光りゆく」(「夏に入らんとして」)という、「光」と「青」が合わせて描写されている短歌が収録されている。これは、青い「光」が今井の激しさを沈静させる作用があったのだと考える。彼女は自分の内にある激しさに苦悩していた。太陽の強い「光」ではなく、「蒼白い光」こそが今井の苦しみに寄り添うものだったのである。

そして、「光を慕ひつつ」以降の「光」では自身の苦しみを癒すものとしての「光」が彼女の短歌の中で主流になる。それは「片片」から「光を慕ひつつ」刊行までの時期が今井にとって「精神的に安定した時期」⁵だったからに他ならない。この時期は島木赤彦の門人となり、アララギ会員になっている。詩人として認められたいという気持ちが強かった今井にとって、島木に歌を認められたことは大きな喜びだったと想像できる。

実際に「光を慕ひつつ」の自序で、今井は「私は、死をば怖れながらも、人間といふものがいかに尊い有難い愛に結ばれ、価値あるものとして造られてあるかといふ事が、分つてゐませんでした。(中略)自分の廻りには自分なんか一生涯、つても其一端をも充分には汲みつくせない愛の光が溢れてゐるのに気がつきはじめました。」と語っている。鬱屈とした気持ちを抱えていた今井は、「光を慕ひつつ」の出版段階で「愛の光」に気付き安定した精神を手に入れることができていた。

そして、苦しみを癒す「光」は多少の例外はあれど「一粒」

や「ほのかに淡く」のようなかすかな光であることが多い。かすかで小さな「光」は今井の濁った心を癒してくれるものだった。それは自身の苦しみを映し出す太陽の光とは異なる。人一倍苦しさを抱えていた今井が共感を示していたのは小さな「光」だった。

また、今井は「光」を描く際に動植物を共に詠むことが多い。「夕ぐれの光うつれかも雀らは水木の白き花に寄るかも」(「紫草」「水木の花」)や「露かわくあしたの庭をとびすぎし蜻蛉の羽根の光しづけし」(「明日香路」「浪人塚」)のように、雀や蜻蛉などの小さないのちが「光」に照らされている様子を描いている。

かすかな「光」や小さないのちなどの、かすかなものに対するまなざしは「光」に限らず今井の短歌の特徴である。小松靖彦は今井の文学的姿勢に普段見すごされてしまうような「小さきこと」「かすかなこと」へのまなざしがあるとされている。今井は小さくともそこに一心に込めたものを見続け、それを短歌にして発表していたのである。⁶

こうした心のこもったかすかな「光」を今井は大切にしていた。苦しみが淋しさの中に小さな「光」を見つめていくことで、その感情を癒していた。「光」があるからこそ、今井は苦しみに飲まれることなく短歌を詠むことができたのである。

4 死別の歌に描かれる「光」について

今井にとつて「光」とは苦しみを増幅し、またそれを癒すという一見すると矛盾する性質をもつものであった。そして、その「光」は肉親の闘病や死を詠んだ歌に多く登場する。

自分の身の回りのことを詠んでいた今井にとつて、死は身近な題材だった。それは彼女がその人生において、多くの人と死に別れてきたからである。幼少期には祖父父母、青年期には父を、そして姉や弟、妹や母などの家族を看取っている。家族の他にも、島木赤彦や横瀬夜雨など詩歌の師から仲間の女性歌人に至るまで多くの大切な人を亡くしている。特に短歌の師匠でもあった島木赤彦と最愛の姉の死は衝撃が大きく、後に今井は「翼がもがれた」⁽⁸⁾ような気持ちになったと語っている。大切な人々が亡くなるたびに、今井は自身の感情を短歌にしている。

青白きなれが肌へに日の光りまともなればぞたへがたからむ

〔光を慕ひつつ〕「病弟」

吾子が病む熱氣こもらふへのうち金魚うごけりいや照り

光り
〔光を慕ひつつ〕「桜の花と病児」

少女子が死顔にさす窓の光さわやかに世は夏ならむとす

〔紫草〕「逝くをとめ」

吾に照らふ今日の光は変らぬに悔やしきたより読み終へに
けり
〔紫草〕「片羽集 其の一」

ゆく春の光しみにらに鳴き惚くる鶯の声うつし身に沁む

〔紫草〕「逝くをとめ」

上記の短歌は第二歌集「光を慕ひつつ」と第三歌集「紫草」に収められている、肉親の死に際する短歌群から「光」を用いたものを抜粋したものである。死や病の隣に「光」が置かれている。

一首目は、病気で苦しむ弟についての短歌である。弟の肌に陽の光が当たっていることを写實的に表現している。そして、その「光」を見た今井は耐え難い苦しみを覚えていた。前述した「光」の苦しみを強調するという性質がここでも用いられている。「光」は病の間近にあり、闘病したり看病したりするものの苦しみを浮き彫りにする存在であった。

二首目は長女節子の病気に寄りそう母親としての今井の短歌である。病に苦しんで寝ている娘と、金魚鉢の中で動き回る金魚の対比が鮮明である。この対比をつなぐものとして「光」が用いられている。この短歌が詠まれたのちに長女の病気は全快するが、苦しんでいるもののそばに「光」がある構図は一貫している。

三首目は妹さざれが病死する際に詠まれた歌である。ここでの「光」はさざれの「死顔」を照らしている。ただ、病で苦しむもののそばにあった「光」とは異なり、死んでしまったものの近くにあるのは「さわやか」なものとして表されている。生

きている者の周囲の季節は移り変わっていくのに対して、死んだ妹の時間は動くことはない。「光」はその対比を明らかにしながらも、死んだ妹とそれの隣にいる今井に寄り添ったものになっている。

四首目は姉はな子の病気を知らされた際の短歌である。今井はこの病気を知らせる手紙が届いた直後に姉のいる長野県に帰郷し、献身的な看病を行っている。しかし、その看護もむなしく姉は命を落としてしまう。病気を知った今井を「光」が照らしている。ここでの「光」とは日常のことであり、変わらない日常が自分に訪れることに「悔やし」さを感じている。生者を照らす「光」は死に向き合うものの苦しみを鮮明にする存在でもある。

五首目も、三首目同様に妹さざれが死んだときの歌である、この「光」は今井のことを照らしている。今井を照らす陽の光であるものの、悲しみを増幅させるのではなく、悲しみに寄りそう「光」である。そして、その「光」に照らされている今井も驚も今後も生きていく存在である。「光」は生者の悲しみを癒してくれるものだった。

前半四首の「光」が肉親の死や病に対する今井の苦しみや死別の事実を強調するものであり、五首目の「光」はその苦しみを癒していることがわかる。

ここで着目したいのは、今井が苦しみを克明する「光」を死別の歌で描写することで、生者と死者の断絶を明らかにしてい

る点である。「光」によつて今井の悲嘆が克明になるほどに、死や病の事実も鮮明になる。そうして鮮明になった死者と生者がいる空間に「光」が降りそそがれている。平等に「光」が照らすことによつて、生と死の境界が明確に表現されている。死者の時間は死んだ時点で進むことがないのに対し、生者の時間は死者と別れた後も続いていく。今井は生者と死者が同じ「光」に照らされることを描くことで、生者に訪れる時間の変化を表現していたのである。今井の死別の短歌の「光」は、生死の断絶の象徴だった。

この死別の短歌を詠む時に際して、生と死の境界線を明確にするという今井の性質は「光」に限ったものではない。彼女は死者の身体性に着目することで、生死の断絶を明らかにしている。「永劫にとちてしまひし瞳とぞ思へば悲しあはれその面」(「光を慕ひつつ」「若き生命に」)は、妹の久恵が死んだ際に詠まれた歌であるが、生者と死者の視線の隔たりを描いている。永遠に閉じられてしまった死者の瞳を含む顔を、生者の今井が見つめることでその死を実感している。死者は生者のことを見る事は決していない。一方で生者は死者の身体を見る事ができる視線を通して、生と死の非対称性が鮮明になり、自分が今生きているということ彼女が実感していた。

「光」も身体性と同じく、その対比を鮮明にする。生者と死者を平等に照らしていることを描くことが、生死の不平等さを表現することにつながる。死者の時間は死んだ時点で進むこと

のないのに対し、生者の時間は死者と別れた後も続いていく。今井は生者と死者が同じ「光」に照らされることを描くことで、生者に訪れる時間の変化を表現していたのである。今井の死別の短歌の「光」は、生死の断絶の象徴だった。

また、生者を「光」が照らすことで「生」に寄り添う今井の姿勢が強調される。五首目の短歌からもわかるように、これから生きる人の悲しみを癒すために「光」は用いられる。これは今井の「光」は彼女の苦しみを癒すという側面も持っていたためである。「光」はこれからも生きていかなければならないものたちの苦しみに寄り添うものでもあった。

暗い表現がさがちな死の場面において、今井は「光」という言葉を用いることで悲しく苦しいけれど、どこか明るい印象を抱かせることに成功している。今井の「光」は苦しみを癒す性質を持っていた。そのため、「光」は病に冒されたものの苦しみを癒し、また生き残ったものの悲しみを癒すものである。

5 戦時下の今井にとっての「光」

今井の苦しみを癒し、忌避するものであった「光」に対する向き合い方は時代が下るにつれて変化していく。『紫草』には、太陽の光に心を寄せる今井が描かれている。そして、その「光」は世の中の戦時色が強くなっていくにつれて、より強大なものとなる。今井は、大きな輝きを持つ「光」に国の未来を託す歌を詠み始める。

今井が愛国心や戦意を高揚させる歌を詠むようになるのは、日中戦争以降であるが、その以前から「国」にまつわる短歌を発表している。「国」という大きな存在に対する意識は、昭和十八年（一九四三年）に青梧堂から出版した合同歌集『鏡光』に表れている。この歌集は大東亜戦争に関する歌を集めており、その「後記」によると、この歌集の目的は愛国心を表明することにあった。

今井の戦争詠には勇ましいものと、戦時下における生活に寄り添ったものの二つのパターンが見られる。勇壮なものでは「敵軍はふるひ打つべしかげに動く鬼のやからの角も折るべし」〔明日香路以後〕「興振の歌」に見られるような観念的なものが多い。その一方で、生活に即したものだとして「なべさげて女街路を小走れり出征兵はさがたすぎぬ」〔明日香路以後〕「砲声」などの、銃後の女性や彼女らに見送られる兵に寄り添う歌が目立つ。この二つの表現方法を組み合わせることで、今井独自の戦争詠になっている。

強大な「光」は前者の観念的な戦争詠に詠みこまれることが多い。

あたらしき年の光にまことある国の歩みをととのへしめよ
（『こぼれ梅』『神代の春』）
戦ひの気負ひきびしく国をあげて仰ぐ初日よ理想の光

（『明日香以後』『時期』）

わが軍いよよ榮えて大海を^お圧してぞのぼる初日の光

（「明日香以後」「菊日和」）

手をととりて君をたたへむ大和島光に満ちて神も待ちまさむ

（「拾遺」「吉原飛行士を送る」）

上記の短歌は第五歌集として出版予定だった『こぼれ梅』から『今井邦子短歌全集』に収録の「拾遺」に収められている観念的な「光」を用いた歌の抜粋である。国の明るい未来を祈る気持ちが短歌には表現されている。

一首目はおそらく昭和十年（一九三五年）ごろの正月に詠まれた歌である。昭和六年（一九三一年）に満州事変が勃発すると、日本は国際社会から孤立するようになる。今井は満州事変に対し「その時国として大いに覚醒するものがあつた」^⑩と述べている。この歌では「まこと」、つまり「偽りのない誠実な」^⑪国の歩みが、「光」のもとに一つになるように祈っている。

二首目もまた、昭和十四年（一九三九年）の正月に詠まれた歌である。昭和十二年（一九三七年）に日中戦争が始めると、アジア諸国の救済と共榮という戦争目的のために軍事行動が活発化する。今井は戦時色の強くなる世の中において、「国をあげて」の戦争に賛成し、協力している。戦争を起こしている日本という国を照らしているのは「理想の光」である。「光」を「理想」として捉えることは、今までの今井の短歌では見られなかったことである。この短歌において、「光」は忌避するものでも、

寄り添ってくれるものでもなくなってしまった。「光」とは国を照らすものであり、日本の軍事行動を正当化するものであった。

三首目は昭和十八年（一九四三年）の秋に詠まれた歌である。太平洋戦争の戦況がいよいよ悪化し、長男の幸彦が徴兵されるなど今井の生活にも影響が出ている時期である。今井はアツツ島玉碎にまつわる短歌群を発表するなど敗北が続く日本軍に同情的な歌を詠むとともに、この歌のような勇壮な短歌を詠んでいる。勝利は絶望的になっている状況で、軍が「栄え」ることを望んでいる。このころに創作された多くの文学は「減退しつつある国内の戦意を鼓舞」^⑫する目的が見られ、この歌もそれに則ったものであると思われる。今井は日本軍に「光」が昇ることを信じ、それを歌に詠むことで戦意を掻き立てようとしている。「光」とは国の勝利のことであり、明るい未来のことでもあった。

四首目は昭和五年（一九三〇年）ごろに日独間を飛行した吉原清治飛行士に向けた歌である。大和島とは一般的に大和の国、つまり現在の奈良県を中心にした地域のことを指すが、これは日本全土を指すと思われる。「君」、この歌では吉原飛行士が大陸を横断することで「光」が「満ち」ることを祈っている。「光」を臨むことは、吉原飛行士を讃え、その無事を願うことでもあった。称賛や祈願という気持ちと「光」は密接に結びついていることがわかる。

以上のように、国の未来を祈る先として「光」があり、それは初日の出のように国を満たすほどの強く大きいものだったと

考えられる。「光」が照らしてくれる国の未来は明るいものになることを今井は信じていた。そのような一種の信仰先とも呼べる「光」の在り方は、従来の今井の価値観と一線を画している。国を鼓舞するために「光」が短歌で用いられているのである。

戦意や国威を高揚させるための文学作品に「光」が用いられるのは今井に限った話ではない。昭和十七年（一九四二年）に情報局指導のもと文学報国会により選定された『愛国百人一首』には、『万葉集』から幕末までに詠まれた「愛国短歌」が収められている。その歌集に収録されている歌の中には「しきしまのやまと心を人とはば朝日にほふ山ざくら花」（本居宣長）など、「光」という単語ではないが太陽の光が描写されているものがある。日本人の心は朝日に照らされる山桜であるとするこの歌を情報局、ひいては政府は愛国心が表れている歌だと定義している。その他にも太平洋戦争開戦時の中国文学者の竹内好の日記には「戦争は突如開始され、その刹那、われらは一切を了得した。一切が明らかとなった。天高く、光清らに輝き、われら積年の鬱屈は吹き飛ばされた。」と書かれている。竹内に限らず、知識人の日記には「太陽」や「光」の単語が見られる。¹⁵太平洋戦争の開戦は当時の人々にとって大きな「光」だったことがわかる。これについて小関素明は日中戦争が泥沼化することで戦争の「大義」を見失っていた日本国民の、真珠湾攻撃によってその「大義」が明確になったことに対する「爽快感」と「開放感」であると述べている。¹⁶

戦争、主に太平洋戦争は当時の人々にとっては鬱屈した気持ちを吹き飛ばしてくれる「光」だった。今井はその「光」を信じ、国も未来をそれに託していた。そのため、国の未来を願う短歌の「光」は強大なものでなければならなかったのである。

ただ、今井の国威高揚のための「光」の使用は満州事変前後から始まっており、日中戦争や太平洋戦争期の「光」の表現とは時期が多少ずれている。このことは今井の天皇崇拜と関係していると考えられる。今井は大いなる者に対しては非常に敬虔で、人力以上のもののあることを信じる性格をしていた。現人神とされていた戦前の天皇や皇族に対する畏敬の念はこの性格から生まれている。

彼女は明治天皇崩御、大正天皇即位や崩御の際に歌をこまめに詠んでいる。そこに表現されているのは、彼女の絶大なまでの天皇に対する敬意である。明治天皇崩御には「日の御子が崩きまし、日の暁に淋しう咲きししやうらん繡蘭の花」（「迷走」）「明治天皇の崩御を伝へらる」と「淋しさ」を直接的に表現し、大正天皇即位の際には「天ぐも、いゆきはゞかりそらにみつ大和の国はかゝやけるかも」（「光を慕ひつつ」十一月十日（大正四年））と晴れやかな気持ちでその即位を祝っている。

上記の歌からもわかるように、今井にとって天皇とは「日の御子」であり、その輝きが日本の国を照らしていることを若いころから信じていた。「日の御子」を崇拜する気持ちは、国の未来を照らす絶大な「光」の表現と重なっていったのだと考え

られる。そのため、今井は早い段階から、戦争詠に「光」を詠んでいたのである。

また、この「光」の短歌が詠まれる時期は正月がほとんどである。正月は「祈ったり決意したりする」場として機能していた。折口春洋の「年明けて大々戦果のとよみ来る汐路のはてに、出でた・むとす」のように、一年の始まりに戦勝を祈願する歌が多く正月には詠まれている。今井も彼らと同様に、国の未来を祈っていたのである。

国を照らす強大な「光」を詠む一方で、今井は自分の苦しみに寄り添う「光」の短歌も同時期に発表している。ただ、その「光」は月の光などの太陽の光以外であることが多くなっている。「^{ゆづつ}夕星の光ををしめ家を出でていく歩みもなくて思ひまぎれぬ」(『明日香路』「憤り」)や「たまさかに月の光をうれしみて庭歩むなりただひとときを」(『こぼれ梅』「春来る」)からわかるように、今井が「をし」んだり、「うれし」んだりして心を寄せる光は太陽の光ではない。

今井は昭和初期から強大な光に絶大な信頼を預けるようになったが、かすかな光に向けるまなざしは変わることがなかった。太陽の光は熱狂し、信奉する対象となってしまうが、「光」は変わることなく今井の苦しみや物思いに寄り添っていたのである。

今井は「光」という大きなものを信じて、疑うことをしなかった。一方で、もともとのかすかな「光」に対するまなざしは常

に持ち続けていた。ふたつの「光」を見つめることで、時代に翻弄される自己を保っていたのである。

6 おわりに

今井の「光」観のおもともとなっていたのは、彼女の満たされない思いであった。「光」は今井の抱えた苦しさを時には強調し、時には癒す存在だった。彼女に正の感情も負の感情ももたらしてくれるのが「光」であり、それを見つめることで短歌を作り出していった。

死や病が身近にあった今井にとって、その悲しみを癒してくれるのもまた「光」だった。生者にも死者にも平等に降りそぐ「光」は生死の境を明確にした。生きながらえた者が過ごすこれからの時間は死んでしまった者には永遠に訪れることはない。その対比を今井の短歌において鮮明にするのが「光」の存在だったのである。

今井に良くも悪くも寄り添っていた「光」は時勢が変化していくにつれ、その性質も変化していく。短歌においてかすかで小さなものとして描かれていた「光」が強く大きな輝きになってしまった。それは満州事変から太平洋戦争までの日本で見られた一般的な表象でもあった。今井は強大な「光」を信じ、そこに国の未来を託した。今井の身近にあり、彼女に寄り添っていた「光」は、信じるべき対象へと遠く離れていってしまった。今井は時代に翻弄されながらも、短歌を詠むことはやめなかつ

た。短歌を詠むことでしか、満たされない気持ちがあった。「光」は、今井との関係を変えながらも常に彼女の隣に存在していたのである。

今後の課題としては、今井の「光」をキリスト教に基づく側面から考察することである。彼女は尋常高等小学校を卒業した後、諏訪のルーテル教会で聖書や音楽、語学の教育を受けている。キリスト教は今井の思想において多大な影響を及ぼしている。本論でも引用した『光を慕ひつつ』の自序で用いられている「愛の光」¹⁵は神の存在が前提にあり、堀江玲子は『光を慕ひつつ』の「光」を「神、キリスト教の神の光であった」¹⁶と捉えている。今井とキリスト教の関係は密接に結びついているといえる。「光」について考察しながら、今井とキリスト教、ひいては宗教についての研究を深めていきたい。

参考文献

- ・生田花世「今井邦子」『国文学・解釈と鑑賞』第一五巻十号、一九五〇・十
- ・今井邦子『今井邦子短歌全集』短歌新聞社、一九七〇・六
- ・『新キリスト教辞典』いのちのことば社、一九九一・九
- ・塚本邦雄「今井邦子論（青春彷徨の歌人・今井邦子）」『短歌』四一号、一九九四・六
- ・堀江玲子『今井邦子の短歌と生涯』短歌新聞社、一九九八・一

- ・『日本国語大辞典 第二版』小学館、二〇〇〇・一二（二〇〇二・一）

- ・『岩波キリスト教辞典』岩波書店、二〇〇二・六

- ・小林信也「祈りの変質」『歌壇』二二巻、二〇〇七・一

- ・小林正明「闘う『源氏物語』―反「万世一系」論―」『日本文学』五六巻第一号、二〇〇七

- ・吉田裕「アジア・太平洋戦争 シリーズ日本近現代史⑥」岩波書店、二〇〇七・八

- ・上野隆生「二十世紀初頭における国民意識形成とナショナリズムに関する一考察」『子ども向け日曜新聞』(Il Giornale della Domenica)と少年向け書籍にみる日本とイタリアの比較

- 『和光大学現代人間学部紀要』第一三巻、二〇二〇・三

- ・小松靖彦「戦争下の文学者たち」『萬葉集』と生きた歌人・

- 詩人・小説家」花鳥社、二〇二一・一

- ・小関素明「天皇制と『大東亜戦争』関与の精神構造：負い目と擬態の精神史」『立命館大学人文科学研究紀要』第二九号、二〇二一・二

注

- (1)「迷走」十首、『片片』十首、『光を慕ひつつ』二九首、『紫草』一九首、『明日香路』三八首、『こぼれ梅』二六首、『明日香路以後』六首、『拾遺』七二首

- (2) 生田花世「今井邦子」『国文学・解釈と鑑賞』第一五巻十号、

一九五〇・十

- (3) 堀江玲子『今井邦子の短歌と生涯』短歌新聞社、一九九八・一
- (4) 塚本邦雄『今井邦子論（青春彷徨の歌人・今井邦子）』『短歌』四一号、一九九四・六
- (5) 堀江玲子『今井邦子の短歌と生涯』短歌新聞社、一九九八・一
- (6) 今井邦子『今井邦子短歌全集』短歌新聞社、一九七〇・六
- (7) 小松靖彦『戦時下の文学者たち』『萬葉集』と生きた歌人・詩人・小説家』花鳥社、二〇二一・一一
- (8) 今井邦子『今井邦子短歌全集』短歌新聞社、一九七〇・六
- (9) 小松靖彦『戦争下の文学者たち』『萬葉集』と生きた歌人・詩人・小説家』花鳥社、二〇二一・一一
- (10) 今井邦子『今井邦子短歌全集』短歌新聞、一九七〇・六
- (11) 日本国語大辞典
- (12) 小関素明『天皇制と『大東亜戦争』関与の精神構造…負い目と擬態の精神史』『立命館大学人文科学研究所紀要』第一二九号、二〇二一・一二
- (13) 日本国語大辞典
- (14) 小林正明『闘う『源氏物語』―反『万世一系』論―』『日本文学』五六卷第一号、二〇〇七
- (15) 小関素明『天皇制と『大東亜戦争』関与の精神構造…負い目と擬態の精神史』『立命館大学人文科学研究所紀要』第一二九号、二〇二一・一二
- (16) 小関素明『天皇制と『大東亜戦争』関与の精神構造…負い目と擬態の精神史』『立命館大学人文科学研究所紀要』第一二九号、二〇二一・一二
- (17) 小林信也『祈りの変質』『歌壇』一二卷、二〇〇七・一
- (18) キリスト教における愛とは、主に神から人間への愛を指す。神からの愛があることによって、信仰者は神の存在を信頼し確信することができる。（富井悠夫『愛』『新キリスト教辞典』・いのちのことば社・一九九一・九）また、キリスト教における光とは神や救いの存在の象徴である。（宮本久雄・『光』『キリスト教辞典』・岩波書店・二〇〇二・六）今井は『光を慕ひつつ』の自序のなかで、神に救われその存在を確信したことを「愛の光」という表現を用いて表したのである。
- (19) 堀江玲子『今井邦子の短歌と生涯』短歌新聞社、一九九八・一
(すずき・ふみお／青山学院大学日本文学会)